日文 教授用資料

教育情報 No.28

Educational information

NGOピースボート 共同代表

畠山 澄子さん

02. Time for peace　今こそ平和を
NGOピースボート　共同代表　畠山澄子

04. 平和な世界への願い
日本原水爆被害者団体協議会代表委員　箕牧智之

06. Peace is not easy to exist
～子どもたちの平和意識を高める出発点～
公益財団法人 広島平和文化センター
副理事長　谷史郎

08.「平和は山里から」
山里小学校平和教育の取り組み
長崎県長崎市立山里小学校　校長　田川雄一

特集

戦後80年、平和について考える

日文のWebサイト

日文

※本冊子掲載二次元コードのリンク先コンテンツは予告なく変更または削除する場合があります。
本資料は、一般社団法人教科書協会「教科書発行者行動規範」に則り、配布を許可されているものです。

心が動く、その先へ。
日本文教出版

巻頭インタビュー　テレビ番組のコメンテーターとしても活躍している、NGO ピースボート共同代表の畠山澄子さんにお話を伺いました。

Time for peace
今こそ平和を

NGOピースボート　共同代表　畠山 澄子さん

同年代のリアルが心に響く

あまり平和について考えたことはなくて、気づいたらここにたどり着いていたという感じです。

しいて言うならば、高校のときに、経団連の奨学金でユナイテッドワールドカレッジというイタリアの高校に二年間進学しましたが、そこは約 80 か国もの人が奨学金で学びにくる学校でした。一学年 100 人の中で日本からは私一人でした。学校の理念として、様々な国の若者を同じ空間で教育することによって、未来の平和につなげるとの考えでした。お母さんがボスニア戦争で亡くなった子がいたり、イラク戦争を経験した子がいたり、ガザ出身の子は今この瞬間も家が爆撃されるかもしれないという状況で、それと比べると、初めての留学で親が小包を送ってくれる世界で生きている私とのギャップにものすごい衝撃を受けました。戦争と平和というと、漠然と過去のことを知ることと思っていたのが、リアルなものであるという気づきがありました。自分はどうやってそういう人たちの言葉に向き合っていったらよいのだろうか、その人たちに恥ずかしくない行動や仕事、生き方とは何だろうと思うようになったのです。

ピースボート＝ふとしたきっかけ

イタリアでの高校を卒業したタイミングで大学進学についてどうしようか悩む中、その学校ではすぐに大学に行かなくてもよいという雰囲気でした。一年余りの空白の時間、冒険してみようかなと思ったとき、当時のソーシャルメディアで「語学を生かして地球一周しませんか」というピースボートの広告が目に留まりました。通訳ボランティアで乗船すると無料で地球一周ができると書いてあったのです。すかさず応募してしまいました。

いざ乗ってみたら、ちょうどピースボートの 25 周年で、広島・長崎の被爆者の人たちが 100 人招待されて、地球一周をしながら被爆証言を世界に届けるというプロジェクトが始まった年でした。そのプロジェクトを継続していくにあたり、下船後も関わりたいかと聞かれ、大学進学までの 9 か月間に予定はないので、「やります！」と勢いよく答えてしまいました。

▲ 2024 年の通訳ボランティア募集の広告

ピースボートの仕事

ピースボートは、国際交流の船旅を出すというのが一番のミッションで、1983（昭和 58）年に始まり 42 年間続いている事業です。なぜ関わっているかは職員によって異なりますが、キーワードとなっているのは、一つは「過去の戦争を見つめ、未来の平和を創る」という設立当初からのキャッチフレーズです。世界各地で今も続いている戦争を見ていくと、世界に共通する構造的な暴力や抑圧の仕組みがあるということが垣間見えてきて、それに対して何をすればよいのかみんなで考えるようになります。地球一周の船旅という手法で平和を作り出しているのです。

もう一つは、「みんなが主役で船を出す」です。働いている人も乗ってくる人たちもお客さんではなく、主体的な参加者となって唯一無二のクルーズを作り上げています。

ピースボートは国連の経済社会理事会（ECOSOC）の特別協議資格をもっていて、国連の会議にオブザーバー NGO として参加して発言することもできます。世界中で出会った、戦争や紛争、環境破壊、気候変動の被害の当事者たちの声を国連に届ける、国際政治に届けるというのも私たちが担っている役割です。

私は、最初は「ヒバクシャ地球一周 証言の航海」という、被爆者の人たちと世界をまわりながら核軍縮や核兵器廃絶を訴えるプロジェクトに特化したスタッフとして働いていました。その後は地球大学という若い人向けの教育プログラムに携わり、最近はクルーズのインターナショナルディレクターとして、様々な国や地域から参加する人たちが、出身地や言語を問わず船旅を楽しめるような環境づくり、あるいは、通訳ボランティアとして関わる人たちが楽しく居心地よく仕事ができるよう統括する立場で乗船しています。

今後の活動とビジョン

今年が戦後 80 年ということで、ピースボートでは特別プロジェクトとして、普段よりもさらに力をいれて、戦争紛争の当事者や平和構築に関わる専門家にピースボートの船旅に乗船してもらっています。今も戦争は終わっていない国がたくさんあります。私たちのサブテーマは、「Time for peace（今こそ平和を）」です。国境を越えて戦争や平和について考えるということは、やはり日本の視点をふまえつつもそこから脱しながら、他の国や地域における戦争や平和の文脈とすり合わせていくという話だと思うので、そこに一層力を入れていきたいと考えています。

畠山 澄子
NGOピースボート共同代表。
専門は核のグローバル史、科学技術と社会論。現在は立教大学や早稲田大学で核のグローバル史を教えるほか、平和や戦争をテーマに体験型・参加型のプログラムも数多く行っている。国連本部における核兵器禁止条約の交渉会議や締約国会議で被爆者のスピーチを通訳。核軍縮に関する国際会議に参加してきた経験から、核をめぐる国際情勢や市民の役割について様々な場で講演を行う。
TBSサンデーモーニングコメンテーター、東京新聞コラム「世界と舫う」連載。

撮影：伊藤　美香子

平和な世界への願い

日本原水爆被害者団体協議会
代表委員
箕牧（みまき） 智之（としゆき）

写真提供：ロイター／アフロ

ノーベル平和賞を受賞した、日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）代表委員の箕牧智之さんにお話を伺いました。

東京大空襲、そして広島での被爆

1945（昭和20）年。3歳のとき、3月10日に東京大空襲があって、アメリカの飛行機が1000機飛んできて爆弾を落としたそうなのだ。瞬く間に焼け野原となり、皆、川へ飛び込んだと聞いた。これは東京にいたら命が危ういと思い、父の出身地の広島に疎開しようということになった。そして5月に疎開。その後の原爆の爆心地から17キロ離れた可部線の安芸飯室（あきいむろ）駅（現在は廃駅）の近くに家を借りて、父は国鉄で働いていた。安芸飯室駅から通い、帰りは決まった時間に降りてきて、家に帰るわずかな距離だけど一緒に歩き、私にとってはそれが至福のひとときだった。

ところが8月6日、午後になると家の前を人がゾロゾロ歩いてきたから、それだけで私は怖くなった。しかも皆、髪はボサボサ、服はボロボロで、履物は履いたり履かなかったりで、水をくれと言って、そのうちの一人はうちに寄り、その人が持っていた缶詰を母が開けて器に移してあげた。桃の缶詰だった。広島市内からここまで歩いてきたそうなのだ。

被爆後の世界

原爆が落ちたとき、父は帰って来なかった。翌日、私たちは父を探しに市街地へ行った。何も知らず、いわゆる入市被爆をしたのだ。母は私を手にとり、弟をおぶって、暑い中疲れ果て家に帰ったら、父が先に帰っていたのだ。聞いたら、地下にいたから助かったと言うのだ。どうやら地下で作業着に着替えていたときに原爆が落ちて、地上に上がってみると広島の街がなくなっていたみたいだ。市街地からレールの上をずっと歩いて帰ってきたそうなのだ。レールの上を歩けば、うちにたどり着くから。今のマツダスタジアムあたりに、国鉄の機関区があって、父はそこから帰ってきた。

ノーベル平和賞受賞エピソード

2024（令和6）年10月11日、ノーベル平和賞の発表の日。私たちは広島市役所に待機していて、発表は日本時間の午後6時。毎年、ノーベル平和賞発表のときは市役所に集合するのが年中行事となっていた。それが10年も続いた。今年はガザのこともあり、そこで平和貢献している人がもらうだろうと話していた。だから6時に市役所に集まっても7時には帰れると思っていた。それがノーベル平和賞は日本被団協と言うから、本当に信じられなかった。

12月8日、授賞式に出席するため日本被団協からは30人がノルウェー・オスロへ渡航した。ノーベル委員会から私たち代表委員3人の渡航費用などは負担してくれた。オスロ空港で降りたら花束贈呈があり、3人で自動車に乗せられ、辺りを見ると前に白バイ、その次がパトカー、それから私たちの乗った自動車で、いわゆる車列を組んでいた。ホテルまでは50分かかる。その後はすぐに自分の部屋に入った。廊下には警察官が24時間警護をしていた。

明くる日。朝食はレストランで皆で洋食を食べた。昼食は部屋に戻ったら弁当を持ってきてくれた。それが中には具が入っていない巻き寿司だったのだ。日本人だから巻き寿司にしてくれたのかもしれない。午後、授賞式の担当者に教えてもらいながらリハーサルをした。

そしていよいよ12月10日当日、授賞式は昼からで、ノーベル賞の式典はスーツ、晩餐会はタキシード着用がきまり。タキシードは一週間以上も借りなくてはいけないので、相当なお金がかかった。それとは別に私は、土産に金属製の折鶴の置物を持っていった。それをノルウェー国王、そしてノーベル委員会の委員長らに渡して、最後の1つが家にある。

授賞式ではノーベル委員会の委員長から直に賞状をもらったから、あれは印象に残った。ズシッと重かった。私がもらったのではない。たまたま私が当番に当たったようなものだから。先人の仲間に感謝をするとともに、私にとって大きな記念となった。

帰りの飛行機でのことだった。「箕牧さん、ビジネスクラスで帰れるよ」と言われて、本当にうれしかった。日本人の客室乗務員がスカンディナビア航空のCEOに、この3人は高齢者でずいぶん疲れているからビジネスクラスに乗せてあげたらどうかと伝えてくれたらしく、それが一番印象に残っている。日本人の温かさに触れることができた瞬間だった。そして機長と客室乗務員がきて、「ノーベル平和賞受賞おめでとう」と言われて、心にこみ上げてくるものがあった。

全国の先生へ

私が証言するときに最後に言うことは、広島が焼け野原となり、松尾さんという方が、広島には7つの川があってそこに海老がいると。そこで、海老で煎餅を作ったそうだ。それが今日の「かっぱえびせん」となり、戦後広島で生まれたお菓子の象徴になったと紹介している。それからもう一つ、当時の子どもたちは、栄養失調でカルシウムやビタミンが足りない。そこで松尾さんはカルシウムとビタミンを併せて、「カルビー」という会社にした。

そして子どもたちに語りかけるのは、「皆さん、君たちが30代40代になったぐらいに日本は戦争をするかもわからん。そのときに戦争反対って言うんよ」と伝え、先生方には、「このかわいい子どもたちを戦場に行かすことがないような教育をお願い致します」と言って終わる。

核兵器のない日本であれ、世界であれ。

著者プロフィール

箕牧 智之（みまき としゆき）
1942（昭和17）年、東京市（当時）板橋区生まれ。
東京大空襲を経験し、その後広島で被爆。
1998（平成10）年～2013年まで地元町議会議員。保護司、PTA会長を長く務めた。
2007年から平和活動に参加し、2021（令和3）年、広島県原爆被害者団体協議会理事長に就任。2022年からは日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）代表委員も務める。
2016年にアメリカのオバマ大統領が広島へ訪問の際にはリポーターを務めた。

撮影：岩本 佳織

Peace is not easy to exist
～子どもたちの平和意識を高める出発点～

公益財団法人
広島平和文化センター
副理事長　谷 史郎

広島平和記念資料館を企画運営している、広島平和文化センター副理事長の谷 史郎さんにお話を伺いました。

広島平和記念資料館・リニューアルの前と後

被爆者が高齢化してどのようにして被爆体験を継承していくのかが課題となっている中、原爆の非人道性や被害の大きさ、凄惨さ、被爆者や遺族の苦しみをこれまで以上に伝えていこうというのが目的です。それには個々の人物の物語に注目することが大切であるということになりました。どうしても数字や統計的な説明というのは、あまり共感を呼びません。人物の物語というのは自分ごととして捉えたときに共感を呼ぶのです。

また、被爆者の遺品や戦災の写真のような被爆の事実がストレートにつながる実物資料を重視しようということになりました。例えば、三人分の学生服を組み合わせて作った三位一体の学生服があります。これは現在の平和大通りなどにあった家々を建物疎開のため中学生が壊して延焼を防ぐ防火帯を造っていたところ、原爆により6000人以上が亡くなったときのものです。展示内容を把握するまでに、言葉だと時間がかかりますが、見れば一瞬でわかります。しかも顔写真つきです。つまりこれを着ていた三人の子どもの人生、そしてその家族の話もあります。本当にリアルに伝わってきます。

▲三人の中学生の遺品（津田 蔵吉氏、福岡 重春氏、上田 キヨ氏寄贈）広島平和記念資料館所蔵

平和を願う原点は、遠い国や昔の話ではなく、今でも起こりうる、自分たちの生活に、家族に及ぶ話だという認識をもつことなのです。

広島平和文化センターの取り組み
ー若い世代への平和学習ー

私たちは全国で平和学習を進めていくことを強力に行っていく時期がきたと考えています。被爆者や戦争を経験された方が非常に高齢になられているからです。

新しい展示をしたことによって、平和記念資料館への来館者がものすごく増えていて、かなり混雑しており、有難いことですが課題も生じています。人が多すぎてゆっくり見られないということです。一つ対応策を立てたのが、令和10年度を目途に展示スペースを500㎡ぐらい広げようと考えています。とりわけ子ども向けを考えないといけないと思っています。例えば説明板の説明が長くて難しいという話があることから、もっと短くして漢字をあまり使わないようにし、テーマも子ども主体がよいと考えています。

もう一つは展示を見て考える時間がほしいということから、カフェのようなくつろげて考えられる場所を作ろうと思っています。そこでは子どもたちで話し合ったり、学校間交流や専門ガイドと話をしたりしたらどうかと考えています。

広島には、平和記念資料館の展示物や原爆ドームなど当時のものがたくさん残されています。平和学習は被爆や戦争のリアリティが出発点になります。その意味で広島は、平和学習の先導役になりたいと考えています。

包括的な平和学習と広島への修学旅行の促進

現在、ヒロシマ平和学習受入プログラムを実施しています。平和リーダーの育成の観点から、8月6日に全国から平和大使として1,300人の小中高生が集まります。受け入れ側の広島の中高生は300人を超えます。平和大使として来た子は必ず、

修学旅行により広島を訪問した児童・生徒数と訪問割合（試算）

区分	全国	北海道	東北	関東	中部	近畿	中国	四国	九州 沖縄
修学旅行生数（小・中・高）(A)	344,327 人	7,596 人	9,010 人	75,287 人	56,358 人	88,377 人	61,261 人	22,360 人	13,527 人
1学年当たりの児童・生徒数(B)	1,011,408 人	37,463 人	65,408 人	335,673 人	175,909 人	179,294 人	60,075 人	29,274 人	128,312 人
訪問割合(A/B)	34%	20%	14%	22%	32%	49%	102%	76%	11%

※地域別の訪問状況を概観するため、子どもたちの広島訪問を1回と仮定し、1学年当たりの児童・生徒数に占める修学旅行生数を、訪問割合として試算した。
※数値は、修学旅行生数は令和5年度の広島平和記念資料館入館者数、1学年当たりの児童・生徒数は学校基本調査（小学校1年生から高校3年生までの各学年の人数を平均した数）による。

あとで学校で話をします。1,300人が、300人に話をしたら39万人になります。ですので自治体が平和を大切にする文化を育てていくのに、とても役立ちます。

プログラムには大きく分けて三つの内容があり、一つ目は8時15分の平和式典に出席後、10時から国際会議場に1,500人が集まる全国こども平和サミットで、子どもたち自らが発表し、皆が平和な想いを共有してその種を持ち帰ってもらいます。二つ目は被爆者と話をして、1,500人全員で原爆の詩を朗読します。非常に心に残る体験をします。三つ目は、全国平和学習の集いを7会場で開催し、グループに分かれて討議をします。例えば、皆さんの地域でどういう戦争経験があったのか。それについてどのように取り組んできたのかなどです。是非、いろいろなものを持ち帰ってもらいたいです。

もう一つの柱は、修学旅行です。我々としては、日本国中の子どもたちみんなに平和の大事さを学んでほしいというのが主目的です。そう考えると、まずは比較的訪問割合の少ない関東地方の学校に話をしていこうと考えています。なぜならば、東京の中学校の修学旅行先は、京都・奈良が多いと思われますが、海外からのオーバーツーリズムで難しくなっているのではないでしょうか。一つの選択肢として、広島での平和学習をメインに、人権や命についても視野を広げて、子どもたちが生きていく上で答えのない世界について議論をすることは非常によいのではないかと思います。

そのために、二つの取り組みを考えています。一つ目は平和学習を考える教師の集いです。まず今、平和学習でどういうことをやっているのかを発表いただき、みんなで討議をしていきます。二つ目がモニター校制度です。初めて広島に来る学校をサポートします。年間20校程度で、関東地方の学校が今のところ対象ですが、趣旨は事前学習をどう行うか、広島でどういう活動をするかなどをサポートすることで広島に来ていただきます。ゆくゆくは事例集を作り、先生方に見てもらうことを考えています。あとは、学校間交流です。

我々もノウハウを蓄積していきながら、どういうところが効果として認められるのかを可視化・分析していきたいと思っています。興味をもたれた学校は、是非広島平和文化センター平和学習課にご連絡ください（平和学習課 082-242-8863）。

広島平和記念資料館 HP

著者プロフィール

谷 史郎（たに しろう）
広島平和文化センター副理事長。元広島市副市長・総務省自治財政局審議官。
広島での活動も5年目となり、多くの平和を愛する都市や市民とともに、全国的に子どもたちへの平和学習を普及していくことに注力している。常日頃から、戦後すぐアメリカで被爆証言活動に従事された谷本清氏の「世界平和に永遠に貢献する方法がわれら自らの被爆体験から展開されなければならぬ」という言葉を胸に刻んでいる。

クローズアップ！ 教育の現場

「平和は山里から」　山里小学校平和教育の取り組み

長崎県長崎市立山里小学校　校長　田川 雄一

爆心地から約 600 m に位置する本校では、当時の児童約 1,300 人が原爆の犠牲となりました。あの痛ましい出来事から 80 年、本校の朝の風景として、玄関前での爽やかな挨拶とともに「あの子らの丘」や「永井坂」を掃除する子どもたちの姿が見られます。本校は敷地内に「原爆資料室」「あの子らの碑」「防空壕」などの平和関連施設を有し、被爆校として、伝統的に平和学習に重点を置いた教育活動を行っています。その取り組みの一端を紹介します。

被爆校として　伝統的な取り組み

８月９日の「平和祈念集会」に加え、本校独自の行事として開催されているのが「平和祈念式」です。本校ゆかりの被爆医師永井隆博士の発案で建立された「あの子らの碑」の除幕式のあった 11 月３日にちなみ、毎年、この時期に行われています。この式では、全児童・職員が「あの子らの丘」周辺に集い、永井博士の遺志を受け継ぎ、世界平和を祈ります。式中に歌われる永井博士作詞の「あの子」は、第二校歌と言われるほどに愛好され、歌を通して平和希求への想いを受け継いでいます。

本校区には「平和公園」「爆心地公園」「如己堂（にょこどう）」等の平和関連施設が数多く存在しています。こうした施設を全校縦割り班でグループワークするのが「平和ウォーク」です。ガイド役の６年生は、これまでに平和案内人*の方々に学び、それを下学年にしっかりとフィードバックします。

被爆 80 年を迎えて　今年度の取り組み

８月９日に平和公園で行われた「平和祈念式典」では、福山雅治さんの「クスノキ」を合唱しました。被爆校である城山小学校、山里小学校の二校の児童が、一つの曲を合唱し、平和への願いを全世界に力強く発信しました。

ともに永井隆博士作詞の歌が歌い継がれている長崎純心大学と山里小学校で、一緒に平和の歌を作り発信する「ピースソングプロジェクト」も進行しています。11 月末に、演奏会を開いて完成した歌を披露する予定です。

長崎市教育員会指定「平和教育研究実践協力校」として、長崎市の「平和教育手引書」に基づいた「対話型学習」も推進しています。研究主題を「他者と関わり自分の思いを表現する子どもの育成」とし、多様な意見に耳を傾けながら自分の考えをもち、深めることができる児童の育成をめざしています。

こうした特色ある平和教育で育った子どもたちが、卒業後も誇りと自覚をもち、平和で民主的な社会をつくる一員として活躍することを願うばかりです。

* 公益財団法人長崎平和推進協会が行っている、被爆の実相と平和の尊さを次世代に伝えていくために活動しているボランティアガイド。

著者プロフィール

田川 雄一（たがわ ゆういち）
1990（平成２）年長崎県の小学校教員として採用され、主に長崎市で勤務。2019（令和元）年に長崎市教育委員会、2021 年に長崎市立南小学校校長、2024 年より現職。

アンケートのお願い

右の二次元コードより回答いただいた方には、ご希望の機関誌の最新号をお届けします。

教育情報 No.28、

日文 教授用資料
令和７年（2025 年）10 月１日発行

編集・発行人　佐々木 秀樹

日本文教出版株式会社
〒558-0041 大阪市住吉区南住吉 4-7-5
TEL：06-6692-1261
FAX：06-6606-5171

本書の無断転載・複製を禁じます。

CD33767

日本文教出版株式会社
https://www.nichibun-g.co.jp/

大阪本社　〒558-0041 大阪市住吉区南住吉 4-7-5
TEL：06-6692-1261　FAX：06-6606-5171

東京本社　〒165-0026 東京都中野区新井 1-2-16
TEL：03-3389-4611　FAX：03-3389-4618

九州支社　〒810-0022 福岡市中央区薬院 3-11-14
TEL：092-531-7696　FAX：092-521-3938

東海支社　〒461-0004 名古屋市東区葵 1-13-18-7F·B
TEL：052-979-7260　FAX：052-979-7261

北海道出張所　〒001-0909 札幌市北区新琴似 9-12-1-1
TEL：011-764-1201　FAX：011-764-0690